

研究代表者	所属学系・職名 外国語・外国文化学系 准教授 氏名 高田英和
研究課題	成長とは何か——世紀転換期の教養小説の(不)可能性に関する研究 Study on the Im/possibility of Bildungsroman at the Fin de Siècle.
成果の概要	<p>【研究の目的】</p> <p>従来の教養小説研究において、世紀転換期は、その最盛期であると同時にその終焉に向かう時期でもあるとされてきた。このような研究では、反産業主義の理念に基づく教養小説が大量に生み出されることで、教養小説というジャンルは現実からの逃避へと固定化される。大量の教養小説間の差異は、ほとんど省みられないか、作家研究、精神分析などの観点から個別に扱われるのみで、相互の関係性が十分に考察されることはなかった。すなわち、世紀転換期の(反)成長言説は、過去への回帰、つまり、死へというように、限定的にとらえられることが多く、従来の教養小説に存在していた、さまざまな「成長」の可能性が形を変えて存続していたかどうかの検討は十分ではなかった。</p> <p>本研究は、世紀転換期の教養小説において過去の多様な「成長」の可能性がどのように受け継がれ／断絶し、変容しているのかを探り、この時期の教養小説の多様性とその相互関係を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【研究の内容・成果】</p> <p>本研究は、世紀転換期の教養小説の多様性を、グローバルな移動が活発になった時代における成長という観点から、学際的に検討することを目的として、以下の項目を明らかにした。</p> <p>(1) 世紀転換期の教養小説群の(再)整理を行い、その多様性を確認しつつ、それ以前の時期の教養小説との連続性／断絶の基本的要素を明らかにし、そして、その際、成長衝動がどのように抑圧／変形されることで、退行観が興隆し、何故そのようなテキストだけが従来の研究で重視されてきたかを明らかにした。</p> <p>(2) (1)の研究を行うと同時に、自然との関係を基盤に形成された、新たな知の体系の中で誕生した、近(現)代的な主体の理想社会を考える創造力が、植民地、自治領などへの(具体的な自然環境の変化を伴う)人間の移動、すなわち、移民の実践／計画に伴い、どのように用いられ、どのように変化したか、その記録などを参照し、そして、それがどのように成長概念と連結したか、考察した。</p> <p>(3) とりわけ(1)の研究基盤として、成長言説について、世紀転換期の文学作</p>

<p>成果の概要</p>	<p>品に限らず、政治、経済、哲学などのテキストなどを視野に入れることで、学際的な見地から成長言説の布置を明らかにした。その際、人種(帝国主義、植民地主義、国家の純粋性・混血性)、ジェンダー(男/女らしさ、同性愛、ホモソーシャル)、階級(社会主義、資本主義)に加え、宗教、道徳、科学テキストとの関係性も考察した。</p> <p>具体的には、本研究では、<i>Jude the Obscure</i> (1895)、<i>Tommy and Grizel</i> (1900)、<i>Peter Pan</i> (1904)における、過剰な欲望、さらにそこで機能するジェンダーの役割などが、および、何かを批判の対象とした狭義の諷刺文学としてではない教養小説の可能性が明らかにされた。また、この時代の教養小説がそれ以前の時期のものよりも、さらに細密な具体的な異国への旅行、移動の言説、財産と支配の過剰なまでの欲望と結びついていることが明らかにされ、現実と虚構が入り交じった異国表象とそれが教養小説に与える影響とそのメカニズムが解明された。</p> <p>【研究成果の発表】</p> <p>日本ハーディ協会第 57 回大会 (2014 年 11 月 1 日、西南学院大学) において「「彼は大人になりたくなかった」——世紀転換期イギリスの(反)成長物語と帝国主義」と題して上記研究の経過を発表し、また、その一部成果を「リベラリズムと帝国主義——少年冒険物語『ピーター・パン』の(不)可能性」(『言語社会』第 9 号, 一橋大学大学院言語社会研究科, 2015 年, pp. 163-179) としてまとめた。</p>
--------------	--